

木村貞治(編)

「理学療法士のための物理療法臨床判断 ガイドブック」

内山 靖

(名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻)

物理療法(physical agents)の歴史は古く、運動療法とともに理学療法を行ううえで重要なものです。世界における理学療法を眺めてみても、温熱電気機器と古典的な徒手の方法による刺激が理学療法士の主たる業務となっているところも少なくありません。また、物理療法は、その原理が物理学を中心とした科学的根拠に裏打ちされて、刺激の種類や強度を定量的に表示できることも大きな魅力です。さらに、治療者ならびに対象者への2重マスク法が実施しやすいために、無作為化比較対照試験を含めて生理的な影響を明確に検証しやすい特徴があります。

このように考えると、物理療法はエビデンスに基づいた理学療法を実行している領域であると思われるかもしれませんが、実際には各物理療法をどのような臨床症状に、いかに適用するのかを明らかにすることが、最も重要な課題となります。これは、理学療法の臨床思考過程(Gedankengang)であり、対象者の所見から臨床推論(clinical reasoning)を重ねて適切な臨床判断を行うものです。

本書は、まさに臨床実践でもっとも重要な臨床判断

を中核とした、誠に時機を得た意義深い書物です。大きく5部から構成され、「II疾患・症状別—臨床判断に基づく物理療法のすすめかた」に最もページを割いています。ここでは日常の臨床で遭遇しやすい19の疾患や病態を取り上げ、さらに、それぞれの症状と物理療法との関係をデシジョンモデルとしてわかりやすく図にまとめています。たとえば、大腿骨頸部骨折術後では、疼痛、切開創、筋力低下、可動域制限などの各症状に対して適用できる物理療法の実際について記載しています。内容はきわめて具体的で、電気療法であれば、電流の種類、パルス、周波数、強度、時間、頻度が書かれています。読者にとっては、さしずめ薬剤の処方箋のように感じられるかも知れません。また、「IIIツール別—物理療法をどう実践するか?」では、9項目に分けてオーバービューと具体的な機器の知識が整理されています。Vでは安全管理について詳細な記述があり、IVの組織のリモデリングに関する記載は、臨床判断をすすめるうえでの理論的理解の一助となるでしょう。

Iで書かれた物理療法における臨床判断のすすめかたは、運動療法との組み合わせを含めた理学療法全体にもあてはまる概念であり、学生の皆様はもとより、臨床や教育に携わる関係者にも広くお薦めできる好著です。

●B5判 576頁・2色刷

定価 7,350 円(本体 7,000 円+税 5%)

2007 年 文光堂・刊